

ひかり

光のなかに

■楽曲データ

歌詞：堂本奎吾 作詞

楽曲：清水脩 作曲

発表：真宗各派協和会 1961年

初演：「親鸞聖人鑽仰講演と音楽の夕」 1961年3月9日 本願寺会館

初出：『親鸞聖人を讃える歌』 真宗協和会 1961年

管理番号：M0335

■創作の経緯

真宗各派協和会（現・真宗教団連合）が「親鸞聖人を讃える歌。聖人を仰いで強く明るく正しく生きぬく生活の歌で詩形は自由とし一般に親しく歌えるもの」という内容で、1960年8月から9月にかけて歌詞を募集。10月1日に入選歌詞発表、同年12月には作曲も完成。翌1961年、《しんらんさま》《みんななかよく》とともに発表。

■校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第2巻収録

底資料：『親鸞聖人七百回大遠忌募集讃歌 親鸞聖人を讃える歌』 西本願寺 [発行年不明]

比較資料：—

校訂の詳細：特記事項なし

■解説

《光のなかに》は、親鸞聖人七百回大遠忌の記念讃歌として、真宗各派協和会により制作された作品です。

親鸞聖人をテーマとする仏教讃歌は数多くありますが、作詞の堂本奎吾さんは日常生活の情景を描写しつつ、ほのぼのとした3節の詞を書かれました。

1番では「おおらかな ひかりのなかに」、2番では「さわやかな ひかりのなかに」、そして3番では、「ひとの世の やみ路をてらし」と詠み、それぞれ「親鸞さまは おわします」と結んでいます。この詞の内容は、『めぐみ』172号で紹介しました《あの空見れば》にもつながっています。さらに、「両手にうけて」という言葉が、全節に詠み込まれていますが、やわらかな、優しい心もちが伝わってきます。

親鸞聖人の遺された『浄土和讃』（讃弥陀偈和讃）のなかでも

一々ののはなのなかよりは

三十六百千億の

光明てらしてほがらかに

いたらぬところはさらになし（註釈版聖典 563 ページ）

と、阿弥陀さまの光明の徳を讃えておられますが、このご和讃にも通じる詞となっています。

◆作曲者について

作曲の清水脩は、大谷嬉子様（第23代勝如上人裏方）の和歌に作曲した《千万の》《み光りの》をはじめ、いつも私たちが歌っている《恩徳讃》などの作曲家としてたいへん有名です。

清水脩さんは1911年、大阪市天王寺区の真宗大谷派寺院に生まれました。お父さんが四天王寺舞楽楽人を勤めておられたこともあり、幼いときから仏教音楽にふれ、大阪外国語学校フランス語科（現・大阪大学外国語学部）に進んでからは、同校グリークラブの指導者となりました。その後、東本願寺研究生の待遇で東京音楽学校（現・東京芸術大学音楽学部）選科に入り、橋本國彦らに作曲を学びました。

戦後は、さまざまな合唱団の指導を行い、全日本合唱連盟の理事長も務められました。ことに、龍谷大学男声合唱団、大谷大学男声合唱団、龍谷混声合唱団とも親交が厚く、これらの合唱団のために、数々の仏教讃歌を作曲しています。戦後の東西両本願寺における仏教音楽の創作・普及に大きく寄与した作曲家のひとりで、1947年、日本宗教音楽協会を組織し、交声曲《蓮如》《平和》《樹下燦々》など、スケールの大きなカンタータから小品まで、多くの仏教讃歌を世に出しました。

◆歌い方について

①「ほのぼのと」という曲想を表す言葉が、楽譜冒頭にあります。全体を貫くものとして意識しましょう。

②前奏が4小節あります。この間に曲のイメージをつかみましょう。

③5・6小節に、同じ高さの音が続きます。音程がおろそかになりがちですから注意しましょう。そして、8分音符をレガートに（滑らかに）歌いましょう。

④7・8小節は、前の2小節よりも幾分大きくはっきりと歌いましょう。

⑤9小節の「ああ」は、感嘆の「ああ」です。ため息にならないように。

⑥10小節の上昇音階でクレッシェンド（だんだん大きく）し、その大きさを保って、11小節をおおらかに歌いましょう。

⑦13・14小節も、連続する8分音符が滑らかに歌えるように練習しましょう。

⑧15・16小節の「親鸞さまは おわします」を、ことに大切に歌いましょう。大きな声でというより、確かな気持ちを、声で表現できるよう練習しましょう。

◆用途など

親鸞聖人を慕う心がさわやかに表現されています。毎月のご命日や、降誕会、報恩講などで歌っていただきたいものです。

解説執筆：大分哲照（御堂演奏会指揮者 福岡教区西嘉穂組明圓寺住職）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 51（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第179号収録）を加筆・修正のうえ、転載。

Copyright: Jodo Shinshu Hongwanji-ha Research Institute. All Rights Reserved.